

# 袋小路の中国

前重慶市長・薄熙来氏は党長老で國務院副総理などを務めた薄一波を父親にもつ太子党の有力者で、市長に就任するや王立軍氏を前任地の遼寧省から引き抜いて公安局長に任命し、「マフィア一掃運動（打黑）」を主導させ、また薄氏は「紅歌（革命歌）を歌おう」キャンペーンなどの左派的言動で大衆的人気を博し、今秋の共産党大会で最高指導部入りが噂されていた。ところが全人代開会直前に王氏は公安局長を解任、身柄を拘束され、薄氏は全人代終了後に重慶市長を解任され、同夫人も逮捕され、失脚は明らかになった。その後の三月二十日頃から、ネットなどで「軍車両や武装警察が中南海（共産党中央委員会と國務院の所在地）をとり囲んでいる」「薄氏の解任に反発した（共産党序列九位の）周永康党政治局常務委員がクーデターを起こそうとして拘束された」などのニセ情報が流れ六人が身柄を拘束されたと伝えられている。

全人代の政府活動報告で温家宝首相は、農民の純収入が過去一年で一・四％増加したとしながらも、所得分配に国民が不満をもっていることを認めた。事実、改革開放直後の一九八〇年からの所得格差を示すジニ係数は〇・三二から、去年は危険水域とされる〇・四〇を越え、今年は〇・五五になっているという。これは「一％の富裕層が全国の富の四〇％以上を独占している」状態で、かつては貧しいながら完全平等の共産主義社会を目指し、これを鄧小平の新政策で競争的社會主義に変更され、最近では和諧社会を目指していた胡錦濤政権下で、格差はますます拡大していた。薄氏、王氏のコンビが「英雄」と称えられ期待されたのは、貧しい庶民の変革への期待と、これに乗りようとした薄氏らの野心との接点が存在していたからであり、政権側は異分子を排除し、最高指導部の内部分裂という危険を予め排除したことになる。

しかし中国の未来に残された可能性は少ないと言わざるを得ない。警察予算は膨大な国防予算をすら超え、今期の全人代で承認された刑事訴訟法は「秘密拘束」を明文で認め、思想工作は強化するとして、毛沢東が自己犠牲の精神を称えた「雷鋒同志に学べ」キャンペーンを五十年ぶりに復活させ、国民はパンを求めて石を与えられることになる。北京五輪のメーンスタジアム「鳥の巣」の設計者で、後に四川地震での政府対処を批判して弾圧された艾未未（アイウエイウエイ）氏は「ネット時代に、人々の思想を統一し、意思を統一しようとする愛国主義宣伝は罪悪」と批判し、中国でも急速に普及するインターネットは、「個人が独立して自由に発言する場を提供しており、中国も民主国家になるチャンスがある」と新メディアに期待を託す発言をしている。いよいよ中国革命の序曲となる大混乱の幕が切つて落とされるだろうか。

（平成二十四年四月十日）

政治学者 殿岡昭郎